

## 感じ分けること、言葉にすること 佐川眞太郎

自閉症スペクトラムを含め、あらゆる精神医学的な症状は、乳幼児早期の子どもと養育者のあいだに内包されている。「甘え」たたくも甘えられない」という心の動き、構えをもとに形づくられていく。著者、精神科医である小林隆児氏はそう主張する。

人間一般の「関係」の発生を遡って考えてみると、突き詰れば胎児と母親との「関係」まで遡ることができる。ただし、直接に、両者の「関係」を観て取る、あるいは感じ取ることができるようになるには出生を待たなければならぬ。

出生後、子と養育者の間には緊密な関係が育まれていく。不安や不快が生じれば、子は養育者を求め泣き、養育者が応じる。育ちとともに、不安や不快だけでなく、喜びなど、さまざまな情動が生じた際、自ら抱きつき、養育者が応じるといふ姿がみられるようになる。そうした姿の背景に働いている心の動きを、私たち日本人は「甘え」として捉えることができる。私たちが「関係」を捉える、感じ取る際、そこには「甘え」にまつわる心の動きを感じ取っているということができよう。

て観てきた姿であった。

著者はそこに、子と養育者のあいだに蠢く「甘え」をめぐる繊細な、微妙な心の動きを感じ取った。「甘えたくても甘えられない」という心の動き、構えを観て取ったのである。私たちはこの心の動き、構えに覚えがあるはずである。この言葉でいわんとしていることがなんとなくわかるはずである。

「甘えたくても甘えられない」という心の動き、構えは普段意識されることはない。「すねる」「あてくされる」「つよがる」「へそまがり」「あまのじゃく」といった振る舞いとして現れ、そこにそうした心の動きが反映されていることが認められる。そして、「甘えたくても甘えられない」状態とは、相反する思いが全く同時に生じている状態である。ゆえに身動きのとれない、どうしようもない状態となり、不安や緊張、戸惑いが高じていく。その不安や緊張、戸惑いを少しでも和らげようとあの手この手を試みる。

こうした試みが固定化したものが症状であるとする。「落ち着きがない」「一人遊び」「視線回避」「知覚過敏」等々、発達障碍を彩る種々の症状へと展開していく。さらに、この展開には、言葉をめぐる問題、行動障碍、強迫症状、作為体験、妄想形成等々、あらゆる精神医学的症状が含まれるとする。

『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム——「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて』(ミネルヴァ書房、二〇一四)を皮切りに、『甘えたくても甘えられない——母子関係のゆくえ、発達障碍のいま』(河出書房新社、二〇一四)で「甘え」

この子と養育者の相互のやりとりを通して、子どもの心は育まれていく。「関係」を鍵概念として、「甘え」と心の「発達」がつながる。つまり、人間は、「甘え」を基盤とした「関係」に支えられて心が「発達」していくということである。心の「発達」が「障碍」されているということは、その根本に、「甘え」をめぐる「関係」の問題が生じているということになる。

著者は二十数年来、自閉症スペクトラムを疑われて受診した子と養育者との「関係」に焦点をあてた治療に臨んできた。そこで目の当たりにしたのは、母親が語る「落ち着きのない子ども」が、母子双方の動きを含めて観ていくと、子どもの母親の存在を気にかけるながらも、容易に近づくことができずに微妙な距離を取りながら、さりげなく気を引くようなそぶりをみせる。あるいは、「一人遊びに没頭する子ども」が、母親の存在を気にしつつも、背を向けて無視するように玩具に注意を向けて気を紛らわそうとしている姿であった。子どもだけ、母親だけに目を向けるのではなく、双方の動きを捉えることによってはじめ

をめぐる問題が加齢とともにどのように展開していくのかを、『あまのじゃくと精神療法——「甘え」理論と関係の病理』(弘文堂、二〇一五)、『発達障碍の精神療法——あまのじゃくと関係発達臨床』(創元社、二〇一六)でどのように治療に臨むかを論じてきた。

自閉症スペクトラムあるいは発達障碍の一般的な理解として、その原因は脳機能の障碍と言われている。そうした理解に対して「人間の発達とは、心の発達とは何か」ということを常に問い続け、養育者との「関係」抜きには発達を考えることはできないとする。自閉症スペクトラムを構成する症状、さらには神経症や精神病等の症状に至るまで、あらゆる精神医学的症状を「関係」、「甘え」の観点から捉え直す。そして、本書で、これまでの論考を踏まえた独自の症状論、精神病理学が構築されることとなる。

著者は丁寧に稿を進める。まず、そもそも精神医学における症状とは何かを問う。「症状とは何か」、それが本書を貫くテーマである。身体疾患との差異を示し、患者に対して臨床家の中に立ち上がる「違和感」こそがその出発点であると説く。現在、わが国では米国に倣い、統一された基準をもととした症状なり特徴なりが、基準以上の割合で有しているかどうかによって診断がなされる。しかし、著者は、その症状の、そもそもその成り立ちに遡って考える。その際、自らに生じる「違和感」を手がかりに、捉え得る現象のみを対象とし、推論を排す。

本書にこんな事例が載っている。一〇歳の男児との面接場面

のエピソードである。

三歳の頃から治療関係が続いてきた母子であった。もともとは母親との面接を行っていたが、かなり語る事ができる年齢にもなってきたため、彼と1対1での面接を試みる事となった。

緊張している様子を感じつつ、面接に誘うと待合にある雑誌を手にとりて面接室に入ってきた。座るなり、その雑誌に書かれていることを、「なんて読むのか」「どういう意味か」と、執拗に質問しはじめたという。現在主流の考えからすれば、こうした「質問癖」は自閉症スペクトラムの特徴の一つとされ、その場に応じた適切な振る舞いをするように、教育的、療育的な関わりを提供するのだろう。しかし、著者は違う。治療者自身の内面に向き合う。思わず真面目に、一生懸命に答えようとする誘惑に駆られそうになったが、しばし考えて答えないうことにしたという。

どういうことだろうか。彼が雑誌の内容を知りたくて質問しているのではないと、緊張ゆえにそのような言動に駆り立てられていると感じ取った。そこでしばらくは言葉をかけることを控えて、ゆったりとした雰囲気になるように努めた。すると、間もなくして彼は苛立つことなく質問をしなくなった。そして、その後、ときおり質問を繰り返すことがありながらも、そのうちに最近あったエピソードを自ら話してくれるまでになったという。

彼の「質問癖」といった振る舞いに接し、「違和」を感じ立ち離感や雰囲気、相手に対峙する際の構え、そして、そこに蠢く心の動きのあり様を感じ取ることである。

通常、私たちは、すでに症状のある人びとに出会い、その症状の原因を遡って突き止めようとする。原因を求めずにはいられない、わからないものをわからないとしておけない心性が私たちにはある。一見すると、脳機能の障碍という説明はそんな私たちの心性に添えてくれるかのようである。

一方、本書では、誕生以降、「甘え」をめぐる「関係」の問題、「甘えたくても甘えられない」という心の動き、構えがどのように展開し、症状を形成していくかが述べられる。自閉症スペクトラムの種々の症状の背景に「甘えたくても甘えられない」心の動き、構えがある。しかし、「甘えたくても甘えられない」心の動き、構えは必ずしも自閉症スペクトラムを診断し得る症状へと展開していくわけではない。神経症や精神病の症状へと展開していくものもあると説く。つまり、単純な因果関係ではない。

従来診断、症状に馴染んでいる臨床家は、本書の述べるところに、程度の差こそあれ違和感が生じるはずである。本書に倣い、その「違和感」こそを突き詰めていきたい。

著者の主張はいたってシンプルである。治療者自身が、患者とのあいだで生じた自らの感覚を率直に感じ取り、感じわけること。そして、その感じ取ったものがいったいどんな性質のものであるのか、患者の訴えとどのようにつながっているものなのかを考え抜き、言葉にすること。そして、さらには、その考

止まる。そして、その「違和」を感じている自分自身に意識を向ける。この「違和」は何なのか。なぜ、どこに「違和」を感じるのか。執拗に質問を向ける姿に相對し、ぎこちなさを覚え、容易に踏み込めない自らを感じる。この自らの感覚を吟味することによって、彼のあり様に、他者と触れ合うことの不安や緊張を感じ取る。かかわりたいけどかかわりたくない。「質問癖」という症状が、身動きのとれない苦しみへの対処として理解できたのである。このような、あまたの臨床事例が本書の主張を雄弁に裏づける。

「甘えたくても甘えられない」心の動き、構えは、個人の振る舞いの中に、場合によっては症状というかたちで認められる。しかし、その成り立ちは、子が養育者を求める、養育者が子の求めに応じる、あるいは養育者が子を求める、子が養育者の求めに応じるという関係のなかにある。現実には、求めが完全に満たされることはない。ゆえに、子のなかに不安や怖れ、躊躇戸惑いが生じる。その躊躇や戸惑いが養育者の躊躇や戸惑いを増幅する。逆もしかりで、これはどちらが先だとか原因だとかいう話ではない。望むと望まざるとにかかわらず、子と養育者のかかわりとはこうした状態なしにはありえない。「甘えたくても甘えられない」心の動き、構えは個人の内部に勝手に生じてくるものではない。

「関係」から観るとは、その良し悪しを問うているのでもなく、ましてや母親をはじめとする養育者に原因を求めているのでもない。子と養育者のあいだに創り出される、その独特の距離に加わる事となる。

とても厳しい臨床家としてのあり方である。私は、このあり方に馴染みたいと強く思う。

著者の一連の著作は、(つ)とした職人の掌を思わせる読み心地があり、私はそこに惹かれてきた。本書を読みはじめてすぐ、パズルのピースがはまるべきところにはまっていくような心地良さとともに、そのよどみない筆致に、お気に入りのドラマシリーズが完結を迎えるような寂しさを覚えた。しかし、読み進めていくにつれて、やはりまた、その、身に覚えのある読み心地が現れ、うれしくなった。そこに新たなシリーズのはじまりを予感したからである。